

クリスマスメッセージ

クリスマスの光と闇

鈴木育三 (社会福祉法人新生会常務理事、日本聖公会北関東教区榛名聖公会教会嘱託執事)

「マリアは日が満ちて、初めての子を産み、布に包んで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らに泊まる場所がなかったからである。」(ルカによる福音書2章6・7節)

アドヴェントの季節になると、なぜか『評伝・バーナード博士・昼も夜も』(キリスト新聞社)を思い起こします。トーマス・バーナード博士が生涯をかけて力尽くした時代は、大英帝国の最盛期であり、産業革命・技術革新によって近代資本主義経済が確立し、貧富の格差は拡大し多くの貧困層が都市に流れ、イーストエンド地区はスラム化していました。彼はロンドンの片隅で路上生活を余儀なくされた少年少女たちに居場所を提供し、1870年「バーナード・ホーム」を開設して生きる意欲、生きる誇りを育みました。後の児童養護・保護法の産みの親となりました。

いつの時代にも生活の場を奪われ、心やすらぐ場所がない人びとが居ます。21世紀の今日でも、戦禍に巻き込まれ、故郷の地を逃れた難民、流民(displaced person)といわれる人びと。原発炉心溶融により放出された放射能に汚染された土地を離れざるをえなかった人びと。経済格差や権力の暴力によって、人権が無視されている人たち。差別と偏見によって社会から排除された人びとを、私たち人間社会は生み出し続けています。この混迷する時代に翻弄され不安に怯えて、自国ファースト、自分ファーストになっている社会では、相変わらず「彼らの泊まる場所」はないのでしょうか。

「あんたの居場所は、ここにはあるよ。」とあって、傷つき疲れ切った動物たちを次々に迎え入れた『マローンおばさん』(こぐま社)の小さな物語は、クリスマスに相応しい物語ではないかと思います。

「あなた方は、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」(ルカによる福音書2章12節)

最初に、この出来事の重大性に気付いた人たちは、社会の片隅でひそやかに生きる人たちでした。この出来事はあまりにも小さな姿で顕れましたから、肥大化した富と軍事力と権力をもつ人びとには小さすぎてその出来事の意味を見出すことができませんでした。

今日「ハイパー（超絶）資本主義」といわれる時代にあって、巨大な富と軍事的支配力（核兵器）に執着する者たちは、あたかも自分自身が大物になったかのように立ち振舞っています。それは彼らが核を笠に着て生きている者たちだからです。

実に腑甲斐ないことに、日本政府はこの運動の発端となった人類最初の被爆体験国であるにもかかわらず、米国の核の傘に覆われたまま戦後72年今日に至っても身動きがとれません。

今日の昏迷する時代にあって、私たちにもたらされた朗報があります。今年7月国連総会で「核兵器禁止条約」が決議され、現在五十数カ国が署名しています。とりわけ、今年の「ノーベル平和賞」が「核兵器廃絶国際キャンペーン」通称「ICAN」(International Campaign to Abolish Nuclear weapons)の働きに与えられたことです。

この草の根の市民運動 NGO（非政府組織）に、ノーベル平和賞が与えられたことは、核兵器に守られた平和は人類に真の平和をもたらさないことが地球市民（オイクメネ）に認知されたことを意味しているのではないのでしょうか。

今も昔もクリスマスは、“powerless power”の誕生の出来事ですから、十字架刑に処せられたメシアの顕現を思い起こして「神には栄え、地には平和、人に恵みあれ。」と賛美するのです。